

# 桃源瑞仙年譜稿（二）

今 泉 淑 夫

## 年譜（二）

### 文明八年（丙申）（四十七歳）

正月一日、年頭十日間、門生ニ詩題ヲ与へテ一日一詩ヲ習作セシム<sup>(40)</sup>

〔百〕十八

正月十三日、周易下經益伝第四十二ヲ抄ス、コノタ、子舟上人識廬<sup>(えきろ)</sup>

庵ニ来宿、周菊、子舟ト季玉ノ曹洞宗ヲ論ズルヲ伝フ<sup>(41)</sup> 〔百〕十八

正月十九日、周易下經夬伝第四十三ヲ抄ス 〔百〕十八

正月二十日、早朝山上山田氏ノ斎ニ赴ク、途次雪ニ難儀ス、帰庵後

明日ノ史記講義ノ準備ヲス 〔百〕十八

正月二十一日、史記ヲ講ズ、マタ周易ヲ三紙抄ス、コノ夜瑞溪周

鳳ヲ夢ム<sup>(42)</sup> 〔百〕十八

正月二十二日、周易下經姤伝第四十四ヲ抄ス、マタ去秋、永源寺大亨ノ

タメニ占筮シテ姤ノ卦ヲ得テ、コノ占ノ寺中争論ノ推移ニ符合セシ

コトヲ想起ス 〔百〕十八

正月二十四日、亡父年登居士ヲ夢ム、周易下經萃伝第四十五ヲ抄ス

〔百〕十八

正月二十五日、小倉実澄ヨリ書至リ、京極氏ニ男子出生ノコトヲ告

グ 〔百〕十八

正月 日、月翁周鏡ヨリ書至リ、桃源手抄ノ人天眼目倭抄ノ借覽ヲ求ム、周易下經升伝第四十六ヲ抄ス 〔百〕十八

二月一日、周易下經困伝第四十七ヲ抄シ始ム 〔百〕十九

二月三日、コノタ、季玉ト神宮參詣セシ夢想アリ 〔百〕十九

二月四日、周易下經困伝ヲ抄シ了ル 〔百〕十九

二月六日、周易下經井伝第四十八ヲ抄ス<sup>(補6)</sup> 〔百〕十九

二月九日、周易下經革伝第四十九ヲ抄ス 〔百〕十九

二月十三日、周易下經鼎伝第五十ヲ抄ス、梅甫淑マタ百川学海中ノ茶經ヲ写ス 〔百〕十九

二月 日、周易下經震伝第五十一ヲ抄ス、コノ前日、興源寺ノ斎ニ至ル間

赴キ、帰路ニ退藏寺ニ寄り藏室密ト陰陽道胎兒男女ノ分別法ヲ論ズ

〔百〕十九

二月二十一日、周易下經艮伝第五十二ヲ抄ス 〔百〕十九

二月二十二日、水暖ム、東西二庵ノ數僧出デテ石垣ヲ修補シ、掬月庵下ノ路ヲ舗修ス、周易下經漸伝第五十三ヲ抄ス 〔百〕十九

二月二十四日、周易下經帰妹伝第五十四ヲ抄ス 〔百〕十九

三月三日、梅岑庵ニ詩例会ヲ催ス、異鴻臚ソノ邀頭ヲ勤ム 〔百〕二十

三月四日、錦江景文ノ招キニ応ジ、西安嚴寺ニ梅花ヲ観ル、マタ一

雲庵ニ煎点アリ、五日帰庵ス、三日ヨリ六日ノ間ニ周易下經農伝第  
五十五、旅伝第五十六、異伝第五十七、兌伝第五十八ヲ抄ス〔百〕  
三十

三月七日、周易下經渙伝第五十九ヲ抄ス、是ヨリ先、西軍畠山氏ノ  
自害スルヲ夢ム、コノ日、壳炭小法師來リテ大内政弘ノ帰国セント  
スルヲ伝フ〔百〕二十

三月八日、黎明、墳寺ノ僧ノ六角氏ヲ刺害スルヲ夢ム、コノ日諸僧  
ノ花見ニ出ズルモ、彦侍者ト共ニ庵中ニ留マリ周易下經節伝第六十  
ヲ抄ス〔百〕二十

三月十一日、周易下經中孚伝第六十一ヲ抄シ始ム〔百〕二十

三月十二日、小倉実澄、梅岑庵ニ來訪ス、〔百〕二十

三月十六日、周易下經中孚伝第六十一ヲ抄シ了ル〔百〕二十

三月十八日、繼宗禪派來訪シ、夕刻帰ル、周易下經小過伝第六十二  
ヲ抄ス〔百〕二十

三月二十日、周易下經既濟傳第六十三、同未濟伝第六十四及ビ朱子  
付錄ヲ抄ス、小倉實澄來訪シ、煎点、聯句アリ、百句成ル、コノ頃  
生活漸ク困憊シテ講抄遲滯セントス〔百〕二十二

四月二十八日、永明院ノ月浦中珊來訪シ、手書ノ長曆・府天曆二編  
ヲ桃源ニ与ヘ曆術ヲ伝授ス、桃源マタ月浦ノタメニ周易乾坤咸恒ノ  
四卦ヲ講ズ〔百〕二十一

四月二十九日、先考年登居士三十三回忌辰齋ヲ當ム〔百〕二十一

五月二十七日、前永源寺北溟元渭、熊原村臨濟庵ニ示寂ス、諸徒ト  
謀リテ法事ヲ營ミ、祭文ヲ製ス、マタ功林宗勲ノ北溟ヲ悼ム詩ヲ次  
韻ス〔百〕二十一〔本谷 小補〕  
六月十九日、曹源寺石頭庵子真禅史示寂ス、コノ夜葬儀ヲ當ム〔百〕  
二十一

雲庵ニ煎点アリ、五日帰庵ス、三日ヨリ六日ノ間ニ周易下經農伝第  
五十五、旅伝第五十六、異伝第五十七、兌伝第五十八ヲ抄ス〔百〕  
三十

六月二十一日、午後東坡詩ヲ講ズ、マタ周易繫辭上之一第一章ヲ抄  
ス〔百〕二十一

六月二十八日、北溟ノタメニ臨濟庵ニ写經供養アリ、桃源他僧ト共  
ニ之ヲ校讐書写ス、觀音懺法ハ修スルニ及バズシテ帰庵シ、周易繫  
辭上之一第二章ヲ抄ス、コノ朝仏鑑錄ヲ読ム〔百〕二十一

七月一日、午時退藏寺ノ密首座來訪ス、是ヨリ先、山中ノ某僧藏書  
ヲ売却セントシテ密首座ニ託シ之ヲ桃源ノ許ニ預ケ置ク、コノ日其  
ノ価格ヲ定ム〔百〕二十一

七月十四日、永安寺孟蘭盆会ニ赴カズ、周易繫辭上之一第四章ヲ抄  
ス〔百〕二十一

九月晦日、慶源道幸禪門ノ秉炬法語ヲ製ス〔五山仏事法語集〕

十月二十二日、周易繫辭上之一第五章ヲ抄ス、七月十四日以後閑暇  
ヲ得ズコノ日ニ至ル、二十三日三更ニ及ビ抄了〔百〕二十一

十月二十四日、二更ヨリ周易繫辭上之一第六章ヲ抄ス、コノ日寒氣  
甚シク手龜マル、晚間病猫死ス〔百〕二十一

十月二十六日、東坡詩集ノ善本ヲ購フ、識盧庵霖首座餅を持來ル〔百〕  
二十一

〔注〕

(出典略号については前稿參看) (未了)

(40) 正月十三日に記された識語は、元旦以来の所感をのべて稍長文である。

はじめに修正会を相沿の慣行に従つて山中の庵居においても修するとな  
る。「歳旦隨例而修正、夫修正二字、就諸清規考之不見、則豈權輿于僕奴  
之教庠乎」とのべて既に慣例となつた行事についてもその淵源を問うのが  
桃源流で、無自覺な寺院生活に対する批判は随所に顔を出した。前稿冒頭  
に紹介した「三子は其の志の唯だ學に在りて道に在らず、若し強いて之  
をしからしめば、則ちかれの無明を長ずるのみ」云々の言葉はこの日の識  
語に出る。このくだりは小稿の主題でもあるので後にのべる。その志学を

助ける試みのひとつとして、桃源は年頭に十題詩を課した。既に文明六年正月から始めたようであるがこの日の識語にはじめて出るのでこの条にかけて整理する。この件に関する識語は左の通りである。

自初一出一題、而毎日作一詩、々成各就余求是正、其不使者投詩草於

地、以辱之、自改[建改之カ]如此者往反不一二而止、少者六七、多者九十、而始得成一詩焉、時有艱難之中、出奇麗而可見者、是以至第十日、四威

儀中皆靡非詩者、著衣喫皆詩也、洞深放尿皆詩也、有手不积卷者、有脇不露席者、人々桃符門頭曾郎箇々梅花枕上李上座、但未叫兄、未任吹焉耳、自学之遺、自詩之禪、則他時異日、十字街頭耶、孤峰頂上耶、建立也得、掃蕩也得、莫道今日不道、由是觀之、与彼靠壁撞柱、

計一日之蠶餘、想終身之利養者、何啻風馬牛耳矣哉、余也白夜僵卧、鼻息齁々、雖不知鐘鼓之朝暮、亦而摩睡眸而作染鬚之誰也、其題曰、

一老雨、二研晴、三毛鉗子、四孔方兄、五鶯刃曉色、六鷗泛春声、七

方寸地卜築、八半間雲落成、九憶相國寺賜宴、十記曲江院題名、詩成後始覓題中二方字、業已講解、不復改矣、文明天六年蓋斯作自甲午歲資始、去年則曰黃綿襖、曰紫翠屏、曰春初早悲、重曰年後晚梅、曰嘲汗淋學士、

曰賀渴睡狀元、曰揚執載逐貧賦、得曰林劬書遣憐文、曰誦五相一漁翁

可、曰題三別四方蓬臺圖、前年則春、得沵蟬一字、早鶯、分灯僧蠅三字、打氣各得一字、移醉西施、喫紅綾餅餃、柳々州元和脚、雪下

挑灯臘脂藤菜、漢光武渡滹沱河図、題資治通鑑馮道論後、贊雲破月來花弄影郎中、雜脫讀嚴初喜皇甫曾至詩、此歲立春在十一日故以十一字為

題、列于前、甲午詩纔成、太半余改之、乙未少々改之、丙申各自改之、其業之進也可見、老矣翫世如此、可笑、亦損上益乎下之一端、益之又益乎、十三日志之、

前稿補注(3)で触れた兩足院本を底本としたが意味不通の部分は上村本によつて傍注した。これによると文明六年より十題詩を始めたという。元旦より一詩を作り十日に及ぶ。詩草が成ると桃源に添削を求め、桃源は出来の佳くないものを地に投げつけて辱かしめたという。六、七回から十回も改削を繰り返して漸やく一篇の詩が成った初回の稽古が、翌七年は改削が

少なくなり、八年には自らの改作ですむように進歩した。「その業の進むや見るべし」という師の歎賞が門人たちの喜びであった様子が眼に見える。九年は『皇元風雅集』から十雪題をと補5た。〔百〕二十四に「丁酉正旦風日稍和、旧雪連山漫々地也、余故取諸皇元風雅集十雪題、詠自初一日至十日配日出一雪、使諸彦作詩各二章、皆彫鏤心肝、殆乎捐天和、余亦其一而加以是正、則其勞倦之甚不可言也」と心肝を彫鏤して取組んだことをのべる。門人に対する指導の厳しい分だけ改削する側にも要請されるところのある関係が、十題詩の世界に限られなかつたであろうことを推察するとして、とりあえず「其志の唯大學に在りて道に在らざる」ことを標榜する難さを自己に確かめる桃源の姿勢の一端をここにみることが許されよう。この故に年頭の切磋は後年に至るまで語り草とされ、上落後も受けられ、既に環境のかわつた桃源に代つて門人が、さらに没後にもその後繼者が繼承したのである。

文明十七、十八、十九年までは桃源自身の出題であったが翌長享二年には彦龍周興が代り、延徳元年の桃源寂後も彦龍が同三年まで出題、この年六月病没した彦龍に代つて景徐周麟が同四年以後、永源寺時代の門人の要請によつて出題した。『蔭涼軒日録』に、

慈照院景徐翁來降、於書院勸盃、茂叔・芳洲在座、翁話云、桃源和尚

在世時、年々年始十ヶ日以十題作詩、彼徒陽藏主・原藏主云、以桃源

旧例可作十題、仍乞題、題云、鐘色、履声、青混沌、綠徘徊、金衣公

子、赤辨丈人、賀仏寺調造、喜官軍凱旋、唐太宗懷鷺子、漢高祖賞牡

丹、翁云、我亦加衆作詩延徳四・正四條

とみえる。なおこの記事が正しいとすると、景徐の『翰林葫芦集』に壬子の十題詩として載せるものと合わない。「壬子」の文字はあるいは整理の際の誤認かも知れない。

召夫周陽は桃源の許に久しう侍し、書法を横川に模したといふ。明応七年には伊勢に在つて五月五日示寂した。旧識の者が会して斎を営んだことを景徐が記録している。

山上周陽藏主、字曰召夫、久侍桃源和尚之側、才学在躬、而筆法模小

第五表 梅岑庵十題詩題

	詩題		詩題		詩題
文明 6 (a) (出題桃源)	1. 春	文明 19 (長享 1) (f) (出題桃源)	1. 梅花曆	(k) (出題景徐)	1. 春睡
	2. 早鶯		2. 竹葉盃		2. 夜談
	3. 捏蟲庵		3. 青春入睡		3. 煮茗昇
	4. 移醉西施		4. 白髮欺人		4. 讀素油
	5. 噴紅陵餅餕		5. 春書宜春字		5. 諸葛釀來
	6. 柳々州元和脚		6. 老見却老方		6. 伏波拏鞍
	7. 雪下挑膝脂藤菜		7. 人日掃雪桃菜		7. 跋龍翔聯句
	8. 漢光武波溥陀河圖		8. 午時敲永煎茶		8. 賀龜嶺狀元
	9. 題資治通鑑馮道論後		9. 及第後賜牡丹宴		9. 頽楊寮惠日額
	10. 賛雪破月來花弄影郎中		10. 上元前買芙蓉燈		10. 讀蘿山正覺碑
	11. 読嚴維歲初喜皇甫曾至詩				
文明 7 (b) (出題桃源)	1. 黃線襖	長享 2 (g) (出題彥龍)	1. 金闕曉鐘開万户	明応 5 (1) (出題景徐)	1. 雞声月
	2. 紫翠屏		2. 綠髮將軍領白蠻		2. 鳴泛春
	3. 春初早韭		3. 跋明人日東曲		3. 余霞作綺
	4. 年後晚梅		4. 評倭僧斗南書		4. 小雨如酥
	5. 嘴汗淋學士		5. 藏春塢種柳		5. 呂望投竿石
	6. 賀渴睡狀元		6. 凌風台見梅		6. 張良進履橋
	7. 楊執軒逐貧賦		7. 菖芍藥宅		7. 參葉生脚手髮
	8. 林劬書遭懈文		8. 結海棠巢		8. 柳條具眼眉腰
	9. 詠五相一漁翁可		9. 鶯演史		9. 擬揚誠斎丙辰作
	10. 題三別四方臺図		10. 燕污経		10. 論李長吉閨月詞
文明 8 (c) (出題桃源)	1. 老雨	延徳 2 (h) (出題彥龍)	1. 凤曆		※表注
	2. 妍晴		2. 雞人		(a) 『百衲襖』十八 この年は立春が十一日なので十一題としたとある。
	3. 毛錐子		3. 屠蘇酒		(b) 『百衲襖』十八
	4. 孔方兄		4. 意和香		(c) 『百衲襖』十八
	5. 鶯辺曉色		5. 燕尋旧主		(d) 『半陶文集』二(新集四, 960頁) 「十題」自元日始, 桃源会」
	6. 鳴泛春声		6. 蟠過隣家		(e) 『半陶文集』二(丙午藁) (同991頁)
	7. 方寸地卜築		7. 天上文星現		(f) 同上, (同967頁) 「已下, 十題, 自元至十日」
	8. 半間雲落成		8. 洛中花儕廉		(g) 同上, (同981頁) 「以下十首, 自元日至第十日, 共十題, 乃余代桃源所撰也」
	9. 憇相國寺賜宴		9. 読退之毛穎伝		(h) 『翰林葫芦集』 「庚戌正月, 已下十題」
	10. 記曲江院題名		10. 跋魯直錫奴詩		(i) 『半陶文集』二(辛亥藁)冒頭に「十題」と題のみ挙げ, 九題しかない。
文明 17 (d) (出題桃源)	1. 禁漏	延徳 3 (i) (出題彥龍)	1. 鶯花		(j) 『蔭涼軒日錄』(延徳4.1.4条) (k) 『翰林葫芦集』
	2. 漁灯		2. 蓬萊花		「以下壬子正月十種」とするが, 『蔭』記事と合わない。景徐の思い違いか, 明応2—4の問なるべし。
	3. 万年賀		3. 混沌譜		(l) 同上 「以下十題」
	4. 千歩香		4. 芦根看鶴立		※ 他に文明9年に『皇元風雅集』からの十雪題, 上村論文にみえる年次不明の「修史亭」「遠巖暮雪図」二題が知られる。
	5. 犬眠花影		5. 松上知鶴來		
	6. 馬簇柳陰		6. 西王母宴周穆王		
	7. 拔眼中丁謂		7. 東方生侍漢武帝		
	8. 読袖裏堯夫		8. 謝人惠后土廟瓊花種		
	9. 榜一粟乾坤室		9. 就僧求相国芭蕉苗		
	10. 題無邊風月樓				
文明 18 (e) (出題桃源)	1. 招碧友	延徳 4 (明応 1) (出題景徐)	1. 鐘色		
	2. 賦黃公		2. 履声		
	3. 中興風月		3. 青混沌		
	4. 太平漁樵		4. 緑徘徊		
	5. 坊州求杜若		5. 金衣公子		
	6. 京師壳梅花		6. 赤辨丈人		
	7. 読雪堂菜羹賦		7. 賀仏寺調造		
	8. 跋秋崖楮衾詩		8. 喜官軍凱旋		
	9. 真率會守溫公約		9. 唐太宗懷太子		
	10. 徘徊韻解荆園嘲		10. 漢高祖賞牡丹		

補、甚可見者在焉、去年明応七年戊午五月五日卒于伊勢之僧庵、伝聞衰瘦甚矣、梅侍者有旧交之好、出錢一貫文、以營「汁三菜三菓子之齋、而行般若湯、來薰已下旧相識十輩、僉食于闕院之齋、兼行者等、明日則天山忌也、故促在今日所設也、陽行李之中、有桃溪<sup>〔源〕</sup>在山上所作者諸仏事頌詩等二冊、細字紙數薄而厚可喜矣、可必集旧其余以行于時者也、旧交之義也、隣院竺英桂首座送瓜一盆、食籠二重有歎、下茗朋樽、即令免僧招之、辭而不來、（『鹿苑日錄』明応八年六月五条）

その後半にある「在山上作者諸仏事頌詩等二冊」は注目すべき記事である。当時鹿苑院主であった景徐は翌々日七日に自身の退居寮である宜竹軒に寄つて桃源の碧岩抄、孟子抄、左伝を持出し、碧岩抄二冊を琳首座に貸与した（『七目条』）。琳首座はこの斎会に参じた一人であったかも知れない。

周陽遺品の話から桃源の抄物のことに話が及んだことが想像される。廿三日条には、或る僧から陳外郎の宅で桃源の「琵琶之銘并柳牛之贊」を示された景徐は「説此以有感于懷矣」と記している。亡き桃源の面影が濃い。

ところで前稿で大谷大学図書館本『小補東遊集』に横川作品の他に收める桃源作品を少なからず引用したが、この本は山上で横川・桃源に親しかつた南美陽侍者抄写の系統本であった。收められる桃源の作品はすべて永源山中での作品と思われ、他に写本のない貴重な一本であるが、これに関連して結論的に臆測をのべる。周陽が行李中に保管した桃源の諸仏事頌等二冊が桃源自筆か周陽書写本かは判らないが景徐の書きぶりからみて周辺の僧にもあまり知られぬ書であつたらしい。南栄はもしかすると周陽所持本から自分に関する作品を中心と抄出したのではないか。横川の作品が普く書写され知られるのに比して桃源の詩文はこの大谷本と諸書に散見するごく少数の作品を除いてほとんど知られない。周易抄と史記抄をこそ自己の専科とした桃源はそれを本懐としたであらうし、実際両書の写本は広く世に知られているが、門弟に詩を指導し、当時の主要な詩会に参じてなお詩文集の伝わらないのは、あるいは周陽の許にその原本が私有され、その死後に発見されて景徐のさらに余稿を集めて世に行わるへしとの決意にもかかわらず、結局世に佚することになったのかも知れない。

蓮甫祖原もまた横川・桃源の影響を強く受けた一人で、横川は「瑞草蓮甫藏主、天資穎敏、筆勢翩々、后進之後秀也、先是予寓居山上、原旦夕親炙左右、如世所謂曰師曰弟子者、厚意可見也」と評した（蓮甫字頌）。文明十五年、この時桃源は既に上洛していたが、近江から上洛して小補軒に横川を訪ね、先に桃源から安名されていた雪鶴という字号について字頌を作つてほしいと依頼した。丁度そこへ桃源が横川を訪ねてきて、雪鶴二字について横川から異議が出され、桃源はその場で蓮甫と改め、横川がこれに賛同して字頌を作つた、そのことが「蓮甫字頌」の些か長文の序に記されている。行間に二人の蓮甫に対する親しみがみえる好箇の文章である。蓮甫は召夫と同じく横川の書法を学んだらしい。そのことを景徐が次のように記している。

原蓮甫從梅岑者有年矣、好學不倦、而得楷法於小補翁、故下筆有準度、梅翁以玉版紙數百枚付之、蓮甫一手写魯直詩集、復事實之在於注外者、詩義之出於意外者、先輩以細字、填之於本之空處、悉写莫遺焉、而後朱墨勘之、庶無差誤、可謂勤矣、嗚乎、兩翁今也則亡、惟后死者、獨為之賞嘆而已矣、（『鶴臥原蓮甫書山谷詩』）

桃源に貫つた用紙に横川仕込みの書法を以て山谷詩集を書写したもので、山上学徒が古典詩の学習に努めた様子を伝える。横川の示寂は明応四年でそれ以後の作である。明応八年の日記に出る祖原は上洛して景徐の傍にいた。

召原藏主、度与美濃紙二帖并桃源和尚等持入寺法語及相國入寺法語与再住上堂語、以俾淨書焉、予心所欲者久矣、今日時到乎、老門生之責不在茲乎（『鹿苑日錄』明応八年八月廿三条）

文章の様子から景徐に近侍したことが伺える。景徐にとつては「」き師の法語を淨書するのに祖原の手を借りるのがごくふさわしいことであった。景徐の日記にこのあたり桃源ゆかりの記事が目につく。

祖原と共に一韓智姫も景徐の傍らに居したことが次の史料にみえる。桃源の追薦法事を営んだ近江の小倉実澄に宛てた景徐の書状である（『翰林五松居答』）

予自十四五歳、如影隨形、恩義泰海、俄然棄去、為之奈何、萬々憐察、

承聞於識廬、追嚴道場、東川・春栄・錦溪袈裟衡雪可想矣、青銅一

緝、副書見寄、供之影前、在彼在此、益知情態、一韓・蓮甫二藏主、

後事不怠、梅童子無恙、借重惟幸、才子伝二冊、所其手親加朱點者、

与二藏相謀奉獻、使者急帰、點燭臨紙、々短意長、閻筆耳、

識廬庵での法事のことを知らせ、青銅一緝を贈ったのに対する返書で、雪中を識廬庵に向って袈裟でゆく東川旭、春栄宗忻、錦溪異の様子が眼に浮ぶこと、此方では一韓と蓮甫が怠りなく努めていること、この二藏主と相談して桃源が朱点を加えた才子伝二冊を遺品として実澄に贈ることを述べている。一韓と蓮甫は相国寺大徳院に景徐に近侍したのだろう。右にあげた景徐関係の諸史料は、景徐が桃源寂後にその門人の指導後援につとめたことを知らせている。

一韓智効についてなお補うことがある。桃源が蘭圭之のために東坡詩を講じたことは前稿にのべた。一韓も聴聞したのである。桃源の東坡抄は單行本としてはみられないが『蕉雨余滴』と題する一抄があつたらしく、笑雲清三が諸家の東坡抄を集めた『四河入海』の中に引用される。『四河』は瑞溪周鳳の解説、大岳周崇の翰苑遺芳、万里集九の天下白と桃源の抄を収め、大永七年—天文三年にかけて編まれた。その識語に「一翁之聽書者、竹處和尚之口訣也、愚又受一翁口訣矣」とみえる。講義の時期については、大塚光信氏が、『四河』(十九、三)に「今易ノ此卦ヲ桃源御抄シアルホトニ自然ニ御ヒキアルノ」とある卦抄が『百衲襖』十五、六十四才に当ることから、少なくともその抄の部分は文明七年十一月十四日頃のものと推定されている(前掲「史記抄」)。とすれば蘭圭之と同期のことと、あるいは同席したことかと考えられる。この間の様子を万里集九が明応八年、當時万里の許に從学していた笑雲に一韓の送った詩に万里が押韻した詩の序に次の様に記している(藏三下)。

春雨菴桃源和尚、与某梅子、同入万年之社、(中)勢陽安津無量寿精舎之翊公首、(座)一韓、宝所主盟、隨侍春雨之左右、細聴余滴、二十余年、遂帰勢陽之旧栖、主盟之同社笑雲三公丈人、迩來借余梅扉、(中)

平生春雨老人知、髪瘦才麿況數奇、莫道勢濃花隔路、雖云未面細看詩、これによれば万里はまだ一韓と面識がなかつたが、桃源と笑雲を介して知己の如きものであつた。伊勢安濃津無量寿寺の僧だつたらしく、明応八年には伊勢に戻つてゐる。さらに永正元年八月に一韓が景徐と寿春妙永の『湯山聯句』を抄した『湯山聯句鈔』が京都大学に所蔵されていて、その跋に「余侍景徐之左右、荷其恩顧者年久、今見此聯句不覺老淚沾襟、吁成廢人不拜尊顧者十四年也、休矣哉」とするのによれば(京都大学国語国文学資料叢書十二)、一韓が景徐と会わなくなつたのは永正元年から十四年前、延徳二年のことである。とすれば一韓の近況を伝えた先きの景徐の『答松牧居士書』はそれ以前、おそらく延徳元年十月廿八日の桃源示寂後まもなく、実澄が京師の諸僧とは別に永源寺山中で桃源縁かりの者を集め、下山していた一韓は、桃源の死をきっかけに、死後の後始末が済んだ後に伊勢に帰つたものとみられる。なお『東寺宝善提院三密藏聖教目録』

十題詩稿(上村『禪林文芸史譚』所掲)

第百九十九に、無量寿寺一韓西堂に桃源が与えた『梵漢図会』一冊を了庵桂悟が他筆を説いて書写した旨の明応八年五月廿七日記の識語がある。

叢林の塔頭寮舎における内衆の詩会と友社の詩会の経営について朝倉尚の論考がある(「禅林における詩会の様相―相国寺維那衆強訴事件・内衆の詩会―」「禅林における詩会の様相―友社の詩会」)。詩会の準備、当日の運営、作品の整理までをふくむ丹念な論考で、描かれた実態は既に詩僧としての名を獲た人々による中央詩壇の爛熟した詩会であった。これに対する永源寺山中の十題詩会は、未だ詩僧の資格を持たぬ僧らが指導をうけして永源寺山中の十題詩会は、未だ詩僧の資格を持たぬ僧らが指導をうけるための訓練の場であり、通常の詩会が既に熟練した技法がその余韻を享受する世界であるのに対し、ひたすら技法の習得につとめる未熟の世界であった。一方が出発点とするところを他方は終着点とした。しかし桃源でさえ刮目したほどの技倅の進歩とその間の師弟の熱い様子は、京師の雅会が忘却しつつあった初心を山上の小世界が育んだことを語っている。情緒的共同体の緊密な結合はこの初心を桃源の上洛後も継続し、没後にも継承しようと努めた。これら詩題の判明する十題詩を整理したのが第五表である。明応五年以後もこの詩会が継続したかどうか実情は不明である。なお上村觀光は「史記抄の著者桃源瑞仙」の中に修史亭、遠嵐暮雪図の二題で多くの詩衆がみえる詩稿を挿入図版としている。上村は出典を示さないが、錦溪・東綿・圭之・尤公・千之・霖公・季玉・南栄等の山上学徒の名松牧(小倉美澄)の名もみえるので正月十題詩の稿かと思われる。上村が所持したかも知れないこの詩稿の世に出る日が待たれる。

(41) 識語に「此夕子舟育上人來宿識廬、矧上坐往具藁石、偶帰危坐于檠背面、有憒色、便知被這兩古錐罵曹洞宗旨、少焉果然供款曰、季玉藏主・育上人話次及洞譜言句」云々とある。

子舟育については前稿注(35)で、季玉については同(39)で述べた。共に永源寺山中で親しく交わる僧である。菊上座は後に京に出てがこの頃は山上に在って桃源に『磐岩錄』の句説を受けたりしている。(〔百〕十二「菊上人袖碧習句説」)用堂梵材の門人で相國寺に掛錫し、のち諸方知識の門を叩いて、横川の言葉によれば「其蹤迹也、如水上胡芦子、不可覇也」と

いう人であった。水に浮ぶひょうたんのように力を以て制することのできぬ、漂泊の人であつたらしい。かく語る横川の真意はともかく、はじめ周菊と名乗っていたのを、文明九年秋には京にて横川を訪ね、「称呼に不便なるに似る」との理由で玄菊と改称したい希望をのべ、横川はこれに賛成して旭英の字号を与えていた(旭英字頌)。文明十一年に再び永源寺に戻った(横川「贈即は庵玄菊上人帰山上」)。

(42) 識語「早赴山上山田氏斎、宿雪布径、水凌之上難於踏、樹刀山独木橋之傾側、如臨大小紅蓮之八寒、是即無他、只癡足之一念而已焉耳、嘗一朝之口而忘沒身之勞、可不自慚哉、汗々、帰来就案、則有來日史講之冊、句之讀之、殆乎三四遍」

(43) 識語に「廿又一日講史寵又抄易者三三紙、展單而眠、夢詣慶雲拝北禪大和尚尊顔、和尚歎甚賜以一束書焉、平素不以余為似今也在那伽定中、猶且如是賜之大、何以報之、方今千鈞大法擊于一髮之時也、豈其意在此乎、其任之重、非力之所堪而吾將可安眼耶」とある。桃源が瑞溪を敬したことは前稿注(5)にふれた。この識語もそれを告げる一例である。

廿日、廿一日条にはじめて史記講抄のことが出るが、どの巻から開始したのかは見えない。史記抄の諸問題については後述するが、講抄の年記が明らかなのはこの年十一月廿八日の扁鵲食公列伝の識語が最初である。その識語についても当日条にゆする。桃源の『史記抄』は、(一)史記源流(二)集解序・補史序・索隱序・正義序・三皇本紀(三)五帝以下本紀(四)呂后本紀(五)列伝から成るが、史記百三十巻全部を抄したものではない。本紀は全部あるが、十表・八書はなく、世家三十巻は呂后本紀第一だけ、列伝は全部ある。これまで国語学分野で抄物言語の研究がすすめられて『史記抄』についても先行の講抄との関係が確認されている。列伝(第一~六九)の場合、第一~第五七の半ばまでは牧中楚祐講義桃源聞書によつていてこと、以下第五七後半~第六〇までは漢書竺桃抄 第六一~六九(及び第七〇太史公自序)は桃源講季玉聞書、第四五扁鵲食公列伝だけは牧中・竺雲等の講抄がなく、桃源が季玉と新たに研究したもの、他に集解序他と世家は牧中講桃源聞書、本紀第一~第四前半は牧中講桃源聞書、第四後半~第十二と

第六表 史記講抄表

講抄年月日	板本冊数	篇名	先行講抄トノ関係
文明 8. 1. 21始	十	1老子伯夷列伝(1) 2管晏列伝 3韓非列伝 4穰苴列伝 5孫吳列伝 6伍子胥列伝 7弟子列伝 8商君列伝	1~57途中マズ、牧中講 桃源聞書(45ヲ除ク)ニ ヨル
	十一	9蘇秦列伝 10張儀列伝 11樗甘列伝(2) 12穰侯列伝 13白王列伝 14孟荀列伝 15孟嘗列伝 16平慮列伝 17信陵列伝 18春申列伝 19范蔡列伝 20樂毅列伝 21廉藺列伝 22田單列伝 23魯鄒列伝 24屈賈列伝 25呂不韋列伝 26刺客列伝 27李斯列伝 28蒙恬列伝 29張陳列伝 30魏彭列伝 31鴟布列伝 32淮陰列伝 33韓盧列伝 34田儋列伝 35樊噲滕灌列伝 36張蒼列伝 37酈陸列伝 38傅靳蒯成列伝 39劉敬叔孫列伝 40季欒列伝 41袁鼇列伝 42張馮列伝 43石張列伝 44田叔列伝 45扁鵲倉公列伝(3)	
文明 8. 11. 28	十三	46吳王濞列伝 47竇田列伝 48韓長孺列伝 49李將軍列伝	桃源季玉共同抄
文明 8. 12. 15	十四	50匈奴列伝(4)	
文明 8. 12. 24		51衛將軍驃騎列伝(5) 52平津主父列伝 53南越列伝 54東 越列伝 55朝鮮列伝 56西南夷列伝 57司馬相如列伝 58淮南衡山列伝(6)	57後半~60、竺桃抄ヲ中 心ニ
文明 9. 2. 1	十五	59循吏列伝(7) 60汲鄭列伝	61~70、桃源講季玉抄
	十六	61儒林列伝 62酷吏列伝 63大宛列伝 64游俠列伝 65佞幸列伝	
文明 9. 3. 19	十七	66滑稽列伝(8)	
文明 9. 4. 12	十八	67日者列伝 68龜策列伝(9)	
文明 9. 5. 9	十九	69貨殖列伝 70太史公自序(10)	
	二	史記集解序他 三皇本紀 1五帝本紀 2夏本紀 3殷本紀 4周本紀(11)	牧中講ニヨル 1~4前、牧中講ニヨル
文明 9. 9 下諱	三	5秦本紀	4後半~12、桃源講季玉 聞書
文明 9. 10. 23	四	6秦始皇本紀(12)	
	五	7項羽本紀	
文明 9. 11. 14	六	8高祖本紀(13) 9呂后本紀	
	七	10孝文本紀 11孝景本紀	
文明 9. 12. 17	八	12孝武本紀(14)	
(本紀一源流抄ノ間)	九	吳太伯世家	牧中講ニヨル
文明 12. 3. 29	一	史記源流(15)	桃源抄

表注(1) [百] 十八「廿日，……就案則有來日史講之冊，句之説之，殆乎三四遍」「廿一日，講史罷，又抄易者二三紙」

(2) 「此卷大昌天隱翁借以備一覽，在余寢衣榮也，而童行手之為爐火所燒焉，親手補書見還，千載之後有志於史学者，庶幾知為我家焦尾也。」

(3) 「余嘗就慈氏牧中師學此書……季玉藏主使余説此史，適至四十五卷欠焉，即取一兩部医書脈訣等与季玉相議，抄以補集次……」

(4) [百] 二十三「萬月十四日……就識蘆者半日，句遷史匈奴伝，予具來日之講也」「此日講史罷……臘月望日」

(5) [百] 二十三「廿四日，講史記大將軍驃騎伝一卷十數丁了……」

(6) [百] 二十四「丁酉正旦……自月下諱又講史記」

(7) [百] 二十四「二月初一，所謂花朝也，斯日抄史之循史伝畢」

(8) 「季春十九日入曹源寺浴退藏之室翁在先……」

(9) 「余昔壯年之日，就牧中而學此史……文明丁酉孟夏十又二，書于翠微深處軒，時小雨疏々，梅之青者將黃也」「心華院楠室和尚……心華和尚善本顥末記于此云，文明丁酉夏五月日，仙又書」

(10) 「余旧所聞止乎相如伝之半矣，今也季玉藏主就余講此書，……文明丁酉夏五月初九日，是亦村僧書于翠微深處之軒」

(11) 「史記本紀牧中之講止周武而已矣，成王以下今抄之……文明丁酉季秋下諱，蕉了道人書」

(12) 「蕉了子謂，……文明丁酉小春廿又三日夜參半就灯下抄此紀了……」

(13) 「文明丁酉十又一月十四日記」

(14) 「蕉了子謂，武紀之所書……文明丁酉腊月十又七日，就雪案以抄畢……」

(15) 「文明龍轉庚子季春廿又九日，將講遷史之前夕，蕉了斎野积瑞懶志焉」

※ [百] 以外ハ〔史記抄〕各篇ノ譏語。篇名は略記にしたがった。

(44)

源流は桃源講季玉聞書によつてゐることが確かめられている（大塚「史記抄」）。牧中・竺雲の学統については前稿で整理した。既に知られている『史記抄』記事に百衲襖識語の関連記事を加えて講抄年次を整理したのが第六表である。これによると講抄は文明八年正月から十二年三月にかけて列伝→史記集解序他→本紀→世家→源流の順でなされたことが判る。この大粹はかなりはつきりして混乱はなさうなのでおそらく列伝も第一からなされたとみてよいだろう。とすると、この年正月廿一日の講抄は老子伯夷伝第一からなされたことになる。翻つて年記のある列伝第四六→第六九までは竺桃抄によつて文明八年十一月末から翌九年五月初までに終了しているので、各列伝が平均六日の速度でなされ、牧中講桃源聞書という似たような条件によつていることを考慮して、第四五までの各列伝もこの平均の速さで計算すると、八年正月末からはじめて十月末に終了する勘定となり、新講である扁鵲食公列伝は稍ながい準備を要したので十一月廿八日に講了したと考えられるのである。

史記を講ずるに際して依拠したテキストについては大島利一「桃源瑞仙の史記抄を読む」に考證がある。それによれば、底本は元の中統年間の刻本である中統本であるといふ。中統本は集解・索隱の注は含むが正義注は含まない。抄中に正義を参考している部分は牧中講によるものという。牧中の用いた底本は南宋慶元年間に黄善夫の刻した一本であり、吳太伯世家については中統本にじかに拠らず牧中が黄善夫本によつて講義したものに桃源が加筆したもの、としている。この結論によつて大島論文は近藤正齋がその底本を元の至正年間に彭寅翁の刻した開元本としたのを否定する。

識語に「亦庶謂、難哉君子之立世、一小人在下猶君子之衆不能獲其安、況使群小在上、則無地容身可知而曰、嗚呼小人常多而君子常少、數君於焚溺、使斯民再躋于堯舜之域、難矣哉」と激しい言葉を冒頭に列ねている。姤の爻辞と関連するが直接にはこの後に続く記事に係る。「去歲秋、瑞阜主翁大亨、余命筮之、遇姤之巽、按未夫子占法、宜以九四占、其辭曰、包無魚凶、而翁却以之卦九四為占、且慰其意也、丙申正月、寺之監收、有事告退、興源一派議復帰之、姤九四於此有驗矣、姤乃五月之卦也、預戒之

(45)

則可乎」とする。「包むに魚なし、起てば凶」という爻辞について、本田濟は「魚がないというのは、民心が自分から離れることであり、それは自分が民に遠ざかることが招いた結果である。民は小人である」「じつとしている分には差支えないが、起てば凶、起は行動を起こす、民心が離反しているのに行動を起こせば凶」と解釈する（朝日古典選易）事情は詳らかでないが、文明七年秋の永源寺中で住持大亨と対立して僧衆に造反の動きがあつたのであろう。窮した大亨が桃源に身を処する法を占なうことを求め、姤卦が出てその九四爻辞（下から四番目の陽の解釈）によつて事態を静観することになり、その後八年正月にその僧が帰院するに至つた、そのことを驗あたりとみたのである。姤伝を抄するに当り一件を想起した記事である。君子小人云々は山中を起して近江の争乱に及ぶものかも知れない。大亨については明らかでないが文明七年秋に「瑞阜主翁」であつたとすれば前稿第二表、文明八年普山の功林宗勲の前に補うべき人である。

(46) 桃源の人天眼目抄については前稿注（6）でのべた。

(47)

識語に「二月初一日、抄此卦、至四日畢功矣、按困極後變、々則必通也、自丁亥之歲及丙申、十年于此、騷亂不已、而天下至困之極也、物不可終困、豈其今效有出於困乎」とあり、困卦に因んで応仁の乱の十年に及んで未だ止まず世上の窮する事態に及び、窮すれば変ずの易の原理によつてこの年あたりから困卦の外に出るという。この後に昨夕みた夢想の記事が続く。

疇昔之夕、夢与季玉詣伊之神廟、山路險難、其於往時、万杉夾徑、根株屈蟠、進入其廣、則有如教僧白衣者迎接、若欲與酒食者、巡徧諸社以出、帰途逢數僧、恍忽覺矣、余幼年、從齊岳及先年登居士而詣者數矣、余之所祈于神者、唯以母之遺意、欲遂出家本志焉、若其志遂、則道也、學也、兩不在人之後、從立此願以降、二十年之間、每歲必詣、其祈如初、又無他求焉、凡在叢林也、雖無過重之作、而不沈于匱縉之底者、豈其神之有感乎、胡亂之後、所謂道之與學之求遂止、以故不復謁者殆乎廿年矣、不可謂之敬于前慢于後、蓋以無所期也、且夫山河大地皆神

也、日出月没皆神也、梅之寒、杏之暖、無非神焉、鶴之白、鳥之黑、無非神焉、則余与神一也、然則未必祠前手經口呪、神乎神乎、莫道不賽矣。

ここに出る齊岳禪師と父年登居士については前稿注(3)にのべた。また参詣を止めて二十年になること、それが不賽というに当らざることをのべる汎神論、神人合一論は中世神祇論の素材となるであろうが、ここではむしろ参詣祈願が母の遺志によって出家を遂げることであり、出家した際には修道と修学とで人に後れをとらぬことを祈念したこと、叢林にあって「賈縑之底」に沈まないでいられるのは神の加護によるとする、桃源の自意識に注目したい。「賈浮奢」という字が自卑の言語として通用したのに対して「賈縑」を文字通りの偽坊主として逆転させる筆法は異色である。似たような述懐が十一月廿八日付の史記抄識語にもみえる。

余曾慨叢社入場屋之人、例皆其学之不根、故以此書為業、自学此以来、看書無難読者(扁鵲倉伝)

「不根」とは困難な仕事をやり通さぬことを指すか。叢社の人々が詩文の世界でも安易簡便の方途を求める傾向を慨嘆して、最難と目された史記をむしろ専攻して、以来「書を見て読み難きもの無し」と自負する。この後に「實に牧牛師の恩なり」という。前稿で確認した漢書・史記の学統と、これを記述する桃源の筆致は、一方で博士家の「師行」体制に対する叢林学統の対置であったと同時に、他方で叢林内部に既に浸潤していた易きにつく風潮に対しても批判的鋒先きを向けていたことになる。

(48) 両足院本「百衲襖」は巻二十を欠き、上村本には「本巻へ後人の写シタルモノニカ、ル」と注記がある。以下巻二十の識語は上村本による。識語に「上巳之日、隨例聯句、異鴻臚為邀頭也、明日赴景文之招、看桜花於西安嚴、今年花不甚盛、蓋殘寒之所勒、而雖乍喧、終不得其快耳、就一雲庵煎點、展待甚厚矣、但蒸之不至奈何、帰、風雨小起、把傘而至庵、又大雨、五日薄晚記」。なお上村本にはこれらの諸伝を抄した旨の記事がなく、慶大本も巻二十を欠くのではつきりしないが、七日条に渙伝を抄しているので、この間に抄したものとしてここに係ける。

(49) 識語に「參前鉢了、先是夢西賊渠魁畠山氏自殺于其營、以為其雜夢不散

出於口、壳炭小法師來曰、大内氏去將就本国、然則嚮所夢、豈其有兆乎、是乃渙其群也、老蘇所謂欲渙以混「天下者是也」とする。亂は漸く收拾の時を迎へつゝあり大内政弘と畠山義就の動きは事局そのものであつたから、桃源の関心は核心を衝いていた。大内教幸が陶弘護に敗れたのは既に

文明三年十二月のことであり、諸将の帰國がみられるが、政弘が実際に帰国するのは文明九年十一月になってからである。(大日本史料、第八編之九) 西軍の退陣ということで畠山の夢想を大内帰國の兆とみ、さらにこの日の渙伝の抄

と関係づける。「渙其群」の文字は渙卦六四の爻辞にみえる。「六四は、其の群を渙す、元吉なり、渙して丘あり、夷の思う所にあらず」。本田清によれば「離散する天下を救う任に当たる者」「私的な朋党を自分から解散して奉公する者」で、「小さな元気を解散すること」で、より大きな團結ができる。「人々が集まって、丘のようになる。占ってこの爻を得た人ができる」。人々が集まって、丘のようになる。占ってこの爻を得た人が私党を解散して大同団結すれば、大善であり吉である」という。大内の動

きをこれに当るとみたものである。乱を語るとき桃源の視線が近江に注がれていたことは前にものべた。この直後の八日黎明にみた夢はそれにつれていた。識語に「夢墳寺僧某甲侍者刺本州賦守、吁蒼生從茲其少安矣」とみえる。末尾の「吁、蒼生(=民)茲レヨリ其レ少シク安ンゼリ」とは端倪すべからざる夢想といふべきである。

(50) 識語に「此卦始齋前、而終于參前、蓋春日之永、倍於冬日者乎、同舍諸郎欲拉余而看諸寺花、辭而不往、諸郎皆行、獨余之與彦侍者在焉、啜茶畢

功、豈非節之道也、然似至苦、而唯余不以為苦、則亦甘節之吉也」とい

う。「甘節の吉」の語は九五の爻辞に出る。

(51) この部分の識語の写しは断片的で「愚謂、中孚說豚魚吉、朱夫子曰「十一日」三月十六日齋前、自十二日文紀至、故及于今」「此卦象亦似押韻」とあるのみである。あるいは善写本によつて訂正すべきことがある。『豚魚吉』は中孚の卦辞にみえる。「中孚は豚魚にして吉なり、大川を涉るに利あり、貞しきに利あり」。占つてこの卦を得た人、心中に誠信があれば、祭りに於ては、豚や魚を供えても吉。大川を涉るによろしい。た

(52)

だし正しい道を守り続けることを条件とする」(本田积)。因みに識語にみえる「朱夫子曰」について本田は「程氏、朱子は、豚や魚は最も鈍感な物で、それさえも感動させる誠心があれば吉と解する。無理である。」と否定している(四四六頁)。

(53)

識語に「乾一卦、乙未二月下院而始抄之、至三月廿而終焉、尔来以衰疾不復課矣、八月十六日坤無資生、及内申暮春二十日抄、至於未濟上九象下传並朱氏附錄六十四卦、於是乎尽矣、附錄數節未畢、文紀校尉又至、煎茶而聯句、北山吐月促裝而出、百句章成、天將曉焉、閉戶而就寢、以書為夜、恰似蝙蝠、到斎時初起、抄附錄了、未濟于昨、而既濟于今、是亦易之變、他無窮也、廿又一日」とあり、「百」二十一に重ねて「丙申三月二十日、六十四卦之功畢矣、余頗勞倦、於是休息、而為鼠蠭所侵、咳嗽三四旬、偶雖抄此卷、或把筆有興則一丁半丁、興尽則五字十字、不為急務也」とある。周易の抄も漸く終焉に近づき一段落がついた安堵感と、山中の生活の無理がたたつて体調をくずした様子がみえる。以後遅退して、繫辭伝に入るのは六月後旬に至つてからである。

(54)

月浦について「永明媚月浦、守含空祖塔、形槁心灰、有古衲子之風」とある。含空院は開祖寂室元光の塔所。永和三年一溪純が祖師塔所として創めた。「考槃庵」と称した。応永廿二年八月に、足利義持が永源寺に松嶺道秀を訪ねた際に命じて「含空院」に改めた。寂室門下の靈仲禪英以下の耆宿が供養料として各所に所領を寄進し、伊勢國久米守忠名もこれに当る。長禄二年五月に足利義政が武家押領、段錢臨時課役免除を安堵し、『永源寺文書』中同院関係史料を收む。古堂は永禄七年の兵乱で焼失し、現存の堂舎は正保四年如雪文岩の再建にかかるという(愛智郡志)。『蔭涼軒日録』によれば再建は寛永年中一経文守によるところ、義持の命名は、寂室の遷寂の場である「含空台」に因むという。從斯以後大有盛院尤大、居山上六箇寺隨一、永禄七年甲子五月廿三日嬰回禄、寛永中前住一絃寺之東造立、今為本寺住持燕休之所」とみえる。曆

術學習の希望は道書記を介して月浦に伝えられ、七十五歳の月浦の方から出向いて自写の二書を与えた。月浦はまた四十年前に書写した弼注易と他の書写による孔疏を持参して桃源の伝授を求める。桃源は「其志之厚也、願之久也、不可不報矣、不可不遂矣、是余之所以不得已也」と月浦の熱意に応じた。寺院内で発起人が同学の土を聚めて先学の講義を受ける場合(雲草の清規講等)、宮中・幕府に赴いて進講する場合、好学の公家のためその第に赴き講義する場合、寮舎内で近侍する門弟のために基礎的学習など、当時の勉学方法にいくつかの類型があるが、この月浦の場合のように專攻領分を異にする学僧の交換伝授もこれに加えることができる。中世学統の現場における質的地位を確認する作業は、系授・秘伝、あるいは書写の時代である中世の知識体系をみるために今後の課題である。

(55)

識語に「臨濟々北溟一病三年、入五月病革、逆終于廿七日、北溟平素薄於余、以故諸徒謀喪事乎余、不能峻拒、無幾六月之十有九日、石頭子真老入寂、其夜闌維、北溟者山林之根抵也、子真者叢林之真華也、惜矣哉、溟

昨已至瑞石、不可謂不達矣、真則于東山于南禪瑞世有待、今世則亡、遺憾

為不淺矣、雖然竹安・舜庵之二弟無恙、則子真之不忘也、不唯子真之不忘、先石頭亦不忘、可尚、二老之於余、不異天倫、故於子真之義、亦如法兄焉」(傍注は上村本)とする。北溟ははじめ曹洞下に参じたが後に曹源寺開山靈仲禪英に従つて嗣法した。桃源が近江に下った際に小倉美澄が北溟に世話を依頼した。桃源はその「北溟禪師祭文」(大谷小補)、(八二三六)に謝意を表わしている。応仁三年には円枕庵記を請に応じて作った。祭文によれば文明六年に発病、小康の後、七年冬から八年春にかけて再発、五月に入つて病革まり熊原村の林際(臨濟)庵で示寂した。林際庵の開基とされるが(瑞石歴)、円枕庵記によれば靈仲から譲り受けた住んだものである。なお北溟は永源寺住持の世代にも入らず普山したことも見えないが、識語の中に「溟昨已主瑞石、不可謂不達矣」とあるのによれば文明七年に普山していたらしい。『大谷小補東遊集』に桃源の「奉依永源方丈老人悼

林際北溟禪師之嚴勸」と題する二首の七言律詩がみえる（八一三八）。

つづいて六月十九日には子真禅史が示寂した。子真は北溟と同じく曹源派の兄弟にあたる和甫者忍の法嗣で桂林徳昌・繼宗禪派と法系上の兄弟である（前稿系図）。「竹安・舜庵之二弟無恙、則子真之不亡矣」とあり、舜庵は桂林の別号、竹安は繼宗の別号である。共に前稿掲載の「識廬庵記」にみえる。「不唯子真之不亡、先石頭亦不亡」とするのは、石頭庵は桂林の塔所とされるが、曹源派和甫門下の拠点となっていたらしく、文明元年五月、繼宗が伊勢から永源寺に上った時も、文明三年夏、桂林が京建仁寺から永源寺に下った時も石頭庵に居住している。子真是文明三年に永源寺に晋山したが世代に数えない。長老が引き続き示寂したことは永源寺中の異事であつて、このあたり桃源は講抄を休止し、識語にも二人のことを一括して後日に記録しているのは、桃源が葬事に奔走したこと、またその心労と内心の寂寥を暗示する。

(56) 識語に「林鐘二十又一日、午後坡詩講罷忘焉、連日陰雨、山色空濛、久晴不雨、久雨久晴、雲門為甚曰拶」。東坡詩講については注(40)で触れた。

(57) この日の講席にも蘭圭之、一韓智燭が在席したであろう。

識語に「臨濟庵有頓書法華、余又備其數、校讎衆之所書而已」、書畢、例皆修觀音儀儀、余獨不修、而帰抄此章了」とする。ここにも仏事修法よりは周易抄の方を採る桃源の異質な姿勢が浮き出ている。ただ観音儀法不修が気がかりだったようで、蒙山錄の易大極圖説記事に文殊普賢觀音の図があることを以て自分が易を抄することが觀音儀法を修することになるとの行為であったろう。桃源の渋滞する文章が、はね返ってきた緊張を暗示している。この逸脱と自閉の様子は識語にみえる桃源の山上生活でも特殊な時期に属して、この後もこれ程の精神的因縁の様子は見当らない。一体、桃源には胆力の人という印象がある。

かつて応仁元年八月、横川と共に乱中の京を避けて近江に下るときのこ

とである。「僧四人、禿力擔夫兩三人」で堅田浦から舟で柳浜に向う途中で賊船が待ちかまえているという報せに怖れおののいた同行者が「有跏趺而禪者、有看經而祈者、掀篷而吟者、叩舷而歌者」と様々の姿態をみせた時に、ひとり桃源は熟睡（酣寢於浪花之中）していた。あるいは止むなく下舟して舟師に置去りにされ湖岸に茫然と立ちすくんで琵琶湖畔の夕景色を眺めた時の横川の描写は秀逸で「天氣快晴、水天一色、瞻前平野万丈之山、顧後比叡三千之院、隱顯乎平湖之上、如妍醜之對明鏡、既而夕陽西下、人影在地、雁陣落而沙平、魚市散而風腥、疏鐘之出遠寺也、長笛之起漁村也、雖瀟湘八境、不能過焉」（小補東遊集）とある。平明な文字遣の中に僧の不安を無視する自然の美しさを描いて印象的な一節である。横川の感傷的な姿をみながら桃源は「賊船ニ逢ハズンバ安ソゾ此クノ如キ偉観ヲ得ンヤ」と嘆いたという。湖上に賊のあるのが常態という近江は桃源の故郷であったから、という事情を考えても桃源の態度はいわゆる世故に通じた余裕があった。ここまで頼ってきた舟師も実は夜分に墻越しの私語をきくと賊のひとりであった。翌日桃源は賊に賄賂を使いかえって賊に保護されながら無事に柳浜に着いたのである（応仁元年八月二十六日）。永源寺山中で学業に就く桃源のシルエットは意外に骨太であったことを想起しておくのも無意味でない。学の世界についても独自の遠近法を以てしたことを知る記事がある。『史記抄』扁鵲倉公列伝の識語中に「大抵率、志在博識者、拙著述、心在著述者、其才淺矣、蓋今古之常也、物不兩大之謂歟」、為学之徒、不可不知矣、夫人雖究群書、而語無風韻胡為、若或一絶之詩、略覺平安、則足矣、不必博宏為得也、可不戒哉、々々々々」という。学における博識宏才と詩の風韻との両立しがたきこと、学の規模と著述の才との排反を古今の常と見える視座は単なる一家言たるをこえている。修道の世界から離陸しようとした中世の修学の世界に、それなりの学問観、人間觀察が育まれたことを告げる（補註）。これが語録詩文の文飾から席を分つ識語の中にあることについても格別の意義をみうる筈である。

人間の才能の質について思いをひそめたその人自身は、教団に対する懷疑と、自己の生い立ちを回想する時にみせた自意識の強さと、易卦と現実

事象の付合や夢想を語る際にやゝ幻視的傾向を示して、個性的な資質の持主であった。この人が京師を離れて十年に及ぶ山上での生活を経て困窮を語り、講抄の中断、再開直後に自閉的姿勢を示すに至ったこの時期は、あるいは病跡<sup>ペトグラフ</sup>の対象とすべきかも知れない。しかしながらその文章を解釈するに際してむしろ纖説なり、朱子の大系において明らかに万物の中に理をみる中国的合理主義なりに沈潜した中世知識人の資質を前提にすべきであつて、この知的環境の中における個性比定の困難さはひと通りではない。横川景三の平明な散文的傾向に比べても、桃源の漢学的素養は本格的な概念操作を伴う体系性を帯びるものである。その政治情勢や人間觀察に関する評語は周易や史記・漢書等の學問体系の実証として語られてゐる。したがつて易学や史記学の内部においてその整合性を問うことが桃源の思想を論ずる正道であるが、いまはしかし、学僧の生態を語る挿話としてみておくにとどまる。

退藏密師伯于時來話、前此寄賣書一篋、欲余之定其価、昨日注其題目下遣之、故今未決焉。據計一貫文、而余之所買四百五十錢也、余分与諸郎買去而已、蓋曹溫兄壳本也、溫也不識字漢、故倩退藏翁以辨之、密師伯本是不二和尚之徒也、中年漂泊、他家齊甕淹移、今称小院長老、可惜乎哉、若在叢林、東福耶、南禪耶、非黃其衣必紫矣。

下遣之、故今未決焉。據計一貫文、而余之所買四百五十錢也、余分与諸郎買去而已、蓋曹溫兄壳本也、溫也不識字漢、故倩退藏翁以辨之、密師伯本是不二和尚之徒也、中年漂泊、他家齊甕淹移、今称小院長老、可惜乎哉、若在叢林、東福耶、南禪耶、非黃其衣必紫矣。

書籍にある。書籍売買の史料としても興味深い。密師伯は文明七年重陽詩会に名が出、八年二月には桃源と胎児男女判別法について論じた。陰陽道にも通じていたらしい、とわかる。後出の文明九年壬正月条には「退藏々室密公首座」とあるので、退藏寺で首座を勤める退藏<sup>ミツジン</sup>密<sup>ミツ</sup>という人である。「師伯」は師の法兄、師兄のこと。密首座に対する敬称か。経歴が複雑で、識語によればもとは東福寺不二庵岐陽方秀の徒で、中年に至つてからその法脈を離れて他の系脈に属した。「他家」というのは、桃源の永源寺大虚玄廊の死を悼む偈に「今日因畜作偈、且代影前之速香、且弔慰其高弟退藏翁之一哀」とあり、桃源の識語中の用語法によれば「退藏翁」は「密師伯」を指すと思われるから、藏室密は大虚の門徒となつたのである。後に桃源と「日本和名抄」に出る鵠<sup>鶴</sup>・鵠<sup>クガ</sup>の字について論じあつてある。

（周易説卦）<sup>し</sup>（第三章識語）、この日も曹温兄に代つて売書の目利きをしていることからもその学識は高く評価されていたらしい。「今小院長老を称するは惜むべし、若し叢林にあらば、東福か南禪か、黄に非ざればその衣必らず紫ならん」と桃源が惜しむのはその辺を踏まえてのことである。右の説卦識語と同様<sup>（補8）</sup>、ここにも学識の深さにも拘らず法脈を移り漂泊して近江の小寺に隠退したひとりの学僧の面影をみる。

購書の様子は草庵生活の一点景である。この場合は、あらかじめ売書を一括して買手の側に預け、書目の下に希望価格を書き出したもの。総額一貫文、桃源分は四百五十錢とあり、他は山中の僧が買った。かつて桃源が龜泉集証に譲つた三劉宋祁本前漢書は廿五貫文であつたから（前稿三）、「不識字漢」である曹温兄の藏書にはさしたる出物がなかつたようである。書物の事情に疎い者は精通する者に代理を頼み、買手の値ぶみに応じたのである。十月廿六日の識語にも桃源購書の記事がある。或る尼女の預修秉炬法語を著わして、その礼金で東坡詩集の秘本を購入した。識語に、

頃者、惟泉清侍者來、為尼女預修秉炬法語、余信口道著書以与之、尼之与女以二千五百錢為願、時有鬻坡詩者、清侍者寄書告曰、魁本也、若欲購之以觀之、坡詩魁本乃余多年所欲者也、昨日寄全集來、坡而見之、實奇代善本也、遂買為秘本、珍翫不私手、余老矣、得之亦何所用乎、然人各有癖、元凱之癖乎伝也、附等之癖乎履也、或有癖山或有癖錢者、余之癖者在書也、可笑（〔百〕二十一）

既に老いてなお書を求める心理を省りみるのである。陋屋狹小にしてなお読むあての少ない書籍を購入では忸怩たる心境も癖とよぶとして、この心理は古くて新しい。當時京都には專業の古書屋がいて、書囊に書籍を入れて運び、客の前で展げたらしい。景徐周麟の『日錄』に「売書郎欠齒之子來、披書囊而撤向于前、有普灯錄展而見之、有薦福常庵崇禪師和陶潛歸去來辭、一見了、可喜矣、（略）其師正宗和尚取于此者也、又持五家錄抄來、蘆草抄欠齒者一冊乎」（『鹿苑日錄』明応八・四・廿七条）。『売書郎送芋一器曰、所自

裁也」(同、二十九条)。「売書文苑井欠歎来、付二百文、各百文充」(同、明応九。

文苑と欠歎(とその子)という二軒の売書郎の名がみえる。日常的付き合  
いがあり、購入費は付けにして適宜支払ったようである。欠歎はとくに有名で、本好きの季弘大叔は堺の地で欠歎の夢をみて懷しさに落涙している  
ほどである(『熊軒日録』文明)。

藏室密との関わりで看過しがたいことがある、後に改めて触れねばなら

ないが、この僧のふとした座談での挿話が世阿弥に関するイメージを改め  
させたことについてである。

(59) 『史記抄』滑稽列伝の中で「優孟者」の語釈で猿樂に言及し、退藏寺に  
入浴した時に「藏室翁」が觀世十郎のことから世阿弥に及んで「世阿躬長短  
小、起坐足踏而成節、蓋其技能習熟之所使然也。常在不二師座上笑談、且  
併禪寂之一噱」(八二〇五)と述べたことを記録していた。この史料は故森末  
義彰氏が昭和四十四年学界に紹介して評判になった。史料発見の経緯と解  
釈は氏の論考(補<sup>9</sup>)に詳らかである。不二門下にあつた時期の藏室密首座の記憶  
があつて、それを記録する桃源の抄があつて、漢とした世阿弥の形姿が鮮  
明となり足拍子が聞こえることになつたのである。この一点においても密  
首座の名は記憶にあたつする。

(60) 注(57)に引いた識語の後に「顧諸仁、藏諸用」の繫辭の文を引き  
『周易正義』の釈を援用している。繫辭の「これを仁に顧わし、これを用  
に藏し、万物を鼓して聖人と憂いを同じうせず、盛徳大業至れるかな」の  
部分で、本田洛によれば『朱子語類』の釈は「天は万物に生物を吹きこみ  
脈動させながら、その造化の功を自覚しない。全く無心である。聖人は天  
地の化育に参ざるとはいえない、やはり人である。有心である。憂いなきを得  
ない。天は無心なるが故に憂いがない」(四九〇頁)とする。永安寺孟蘭  
盆会に赴かず易抄につめたことと、この一節を「識語」中に引くことと  
の関係は判然としない。ただ繫辭本文はこの一節の直前に「仁者見之謂之  
仁、知者見之謂之知、百姓日用而不知、故君子之道鮮矣」となつていて  
「知は智、仁とい智といいうのも、広大な道の一端に過ぎない。人はどう  
しても自分の見える部分を全体と思いこむ。仁者は道を見て、これを仁と

よび、智者は道を見て、これを智とよぶ。それより下る一般人は、日常生活に於てこの道を用いているのだが、それと悟らない。こういうわけで君子たらんとする者のふむべき道は、これを知る人が少ないのである(本田、四九〇頁)。注(47)でふれた桃源の密かな抱負が周囲の人々に理解されぬことを訴えた春秋の筆法とみることもできる。

(60) 本所架藏本に「文明竜輯丙了、桃源」とあり、「丙申」「丙午」何れかの誤  
写とみえる。傍証なく且らくこの日にかけておく。

(61) 識語に「看前章則抄之、在七月十又四日、尔後不得閑日至小春廿二日又  
抄此章、嗚呼山林之日非永何也、大半所以為人也、非余之罪矣、廿三日三  
更畢、尤沙睡在傍、兩猫亦睡、加余為四睡焉耳」。三ヶ月もの空白が何に  
よるかは不明(注(57)参看)、「大半は人のための所以に」とあり自己の怠  
慢ではないことを強調するのが注目される。四睡図中の猫の一匹は翌日凍  
死した。

(62) 「晩間病猫就死地、余煨紫暖之、少焉遂死、可憐」。桃源は所謂猫好き  
である。文明七年の抄に「猫兒在膝上、以舌為櫛々其毛、不及處獨其頭  
也、吮手拭之、所洗面者歟」と觀察したのは桃源の孤独であつたかも知れ  
ない。上落後も「擁紙被抱猫兒在炉邊、鬢鶯唐祖」(十二長草二・廿二条)とある。  
僧が猫に愛著するのは、しかし、孤独を慰めるためばかりではなかつた。

上村觀光の「猫と大藏經」という小篇は、富岡鉄斎が『無門関抄』に猫と  
大藏經の事が出た筈と筆者に問う話で、「南泉斬猫」に「藏經ヲ鼠ニ食セ  
マイ為ニ猫ヲ餉也、日本へ藏經ヲ渡ストキモ猫ヲ添へテ渡シタト云ゾ」云  
々とみえる、という。中国文学の今村与志雄「猫乘私記」(雑誌「東方」  
連載、工藤一郎氏の教示による)には、清の姚元之『竹葉亭雜記』卷八に  
引用する元代の人のネコの売買証書に、三藏法師がインドからネコをつれ  
てきて經巻を守らせたという説を載せていることが紹介されている。同論  
には、宋代の書物が胡蝶装なのは版心をネズミから守るためであること、  
南宋の陸游の詩に猫が山房の万巻の書を守ることを詠じ、北宋の黃庭堅に  
ネズミ対策に猫を乞うの詩があることも紹介している。我が国の禪僧が猫  
を飼うのにその本能と愛玩とのほかに理由を必要としたとも思われない

が、これらの事どもに連想が及ぶことを妨げる理由もない。鉄山宗純の『金鉄集』策彦周良の『諫齋詩集』特芳禪傑の『西源錄』にも悼猫兒の詩が出て、すなわち桃源に限られぬことであった。

(63) この東坡詩集のことは注(58)で述べた。霖首座の餅の記事は次の通り。

識廬霖上座將三箇婆餅、焦來与余喫、童子之在傍、分一箇与之、不幾又以兩枚与千之、余以為千之必以一枚可償前債、少焉問之、則并吞兩箇了、余愕然如有所失者、余老々大々纏々兩箇、千之其長尺許而三箇、恰如方朔之与侏儒、一人飢死、一人飽死者、不覺大笑絕倒矣、十

月廿六日二鼓後筆、

東方朔の逸事はさておき、ここに出る霖首座・千之は共に先に紹介した年次不明の十題詩中「修史亭」(48頁写真)に出る桃源の門人である。因みにそこに出る「尤公」(景尤)もまた桃源が「十牛図」を教えた門人であり(〔百〕十一)、注(61)にも出る。注(40)参照。

(補5) 十雪詩の題は、韓王堂雪・伊川門雪・袁安洛雪・王獻溪雪・李憩淮雪・李及郊雪・蘇武瓶雪・鄭繁駒雪・孫康書雪・歐陽詩雪で、惟肖得岩『東海瑞華集』、瑞溪周鳳『臥雲藁』にも十雪詩がみえる。惟肖の「和十雪詩序」には「數人而賦一事、則句意必賜襲、觀者厭之、此元人十雪所以作矣、自韓王堂至歐陽禁体、其事繫於雪、而往往見于伝記小説者也、余每愛其格新而語工、以誦焉」と見える。雪という一事に賦するために句趣が重複する難があるがかえつてそのために工夫が求められて「其格新而語工」を目指す格好の練習題となつたものだらうか。『皇元風雅集』は元代詩の総集で南北朝期の五山版がある。別に刻工「陳伯寿」の名が出る南北朝期の覆刻本があり、「流行の書を重ねて影版する企業的な開版に類する」(川瀬一山版の)とみられている。桃源も叢林中に流通したこれらの一冊を所持したものであるうか。

(補6) 井卦に因んで識語で梅岑庵水槽のことについて触れている。京においては井戸はなくてはならないものであるが、応仁元年の近江米住このかた井戸を研究したことがない。山中に庵居する者は高地から木や竹を繋いで水を曳くものであるうか。

(補7)かかる用語例の累積がそのままではその人の思想の質の確証となりがないことは史家の戒しめるところであるが、しかしながら以下の言は上の場合と併せていかにも看過しがたい説得力がある。すなわち桃源には才能と世のいわゆる徳行とを峻別して混同しない眼があつて、かつそのことを語るのに臆しなかつたと信じるほかはない。天才肌だったと評される蘭坡景蔵の人柄と才についての評語である。

蘭坡其称首也、但友社之際、論其人品高下者、大抵以為其言也不朴

実、其学也似浮華、何也、蓋、名喧江湖者、不能朴、实焉、才優著述者、不能不浮華、是從事斯文者之常理也、豈獨可責蘭坡哉、但不足於内而急識於人者、若有聞道也先乎吾、看書也亦先乎吾者、視之如仇讐矣、聞一善則抑之、見一不善則揚之、是無他、唯不欲其名、声、之、在、己、之上、而、妬、忌、之、也、所以有此論也、余聞未俗淺薄故及於此耳、謂我以鄉曲欲而有所党所亦所不辭也、若又欲以學問文章而斧藻示猷者、取人之所長而捨人之所短、其處於己則過者咸焉、不及者頗焉則叢林復興未致寂寥矣

(〔百〕十三) その典型的な例としての南江宗元とその周辺について、今泉『花上集』について」(本所所報第18号)に寸考した。

(補9) 森末義彰「桃源瑞仙の史記抄による世阿弥」(『中世芸能史論考』所収、昭和四六年)